

自分と向き合い、世界とつながる

—『マザーハウスでのボランティア体験から』—

興味を持ったきっかけ

私がなぜインドのマザーハウス()でボランティアに参加しようと思ったのか。そのきっかけは、ある日見たNHKのドキュメンタリー番組でした。その施設の中で働く人々を見たとき、ぜひ参加したい、現場をこの目で見てみたいと強く思いました。

情報を探して『地球の歩き方インド版』いわばバックパッカー向け旅ガイドブックにボランティア参加方法が載っているのを見つけました。私はそれを参考に、まずはマザーハウスから徒歩5分ほどの所にあるShishu Bhavan(シシュババン)という施設で登録をしてオリエンテーションを受けました。月・水・金曜日の15時から登録を行っていました。そして2010年2～3月の1ヶ月の間「死を待つ人の家(カーリーガート)」でボランティアをすることになりました。

私はこの時、好奇心の方が強く、どれほど過酷な日々が待っているか想像できませんでした。

理想と現実、葛藤の日々の中で学んだこと

同時期に参加した日本人は次々に体調を崩し入院、私は1人、外国人たちに混じって黙々とボランティアをしていました。この施設があるコルカタはインド一環境が悪く埃っぽい都市と呼ばれ、日本から直行便で来る日本人にはこの環境は耐えられなかつ

たのだと思います。私が平気だったのは、ボランティア参加前に他の街で長く滞在していたこともあり、耐性ができていたからかもしれません。それでも、あの暗く窓から少しの光しか差さない環境での毎日のボランティアは心身共に辛いものがありました。

施設内はずらっと簡易ベッドが並べられているだけのシンプルな造りでした。私はナースとして参加しましたが、できることと言えば身体拭きと簡単な傷の手当てで、清潔とは言えない少しの薬や消毒液を使用し、1人1人に向き合っていました。基本、仕事は自分たちで探すもので、周りの患者さんたちの様子を見ながらトイレや歩行介助、皿洗いなどをしていました。外国人ボランティアの中には、コルカタの街中で倒れている人々を施設に連れてくる人たちもいました。途中参加した日本人ドクターもいましたが、「僕はここで初めて皿洗いをした、日本でもしたことがないのに」と苦笑いをしていました。

現場での仕事を仕切っているのは基本的にインド人シスターたちです。あるとき私は、苦痛の表情で息絶え、今夜にも亡くなりそうな患者さんを見て、病院に運び処置できないかと、思わず激しく抗議しました。そこでハッキリこう言われました。「あなたはこの人間1人が死ぬまでの費用を全て出すことができるのか、ここにいる全ての人間の分も?一時的に

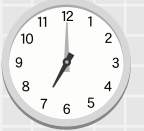


【活動日のスケジュール】

7:00 マザーハウスに集まり朝食(パン、チャイ、バナナ)朝食後にグループに分かれて各施設へ向かい、働き始める

12:00 一旦終了となる

15:00 引き続き働きたい人は集まる各自施設へ行き、終了後も各自解散となる(朝6時から礼拝があり、参加したい人はその時間に遅れないように)



助かってもそれをずっとできないはず、それならそんなことを簡単に言わないで」と。私は何も言えませんでした。悔しかったけれど、確かにその言葉通りなのです。翌朝そのベッドは空になっており、その患者さんが亡くなったことが分かりました。きっと夜中に亡くなり、周りの患者さんはその時を目撃したのだと思います。その日は1日、患者さんも表情が暗く、少し震えているように見えました。どんなことが起こっても、ここでの生活はただ淡々と続いていくのだと痛感した出来事でした。

ボランティアには休憩時間があり、屋上でチャイ(インド版ミルクティー)とクッキーが支給されます。その時間になると、「あなたたちの休憩時間だからちゃんと休んできて」と患者さんやシスターたちに優しい言葉をかけられ、涙が出そうになりました。同時に、私たちスタッフはここでは単なる一時滞在者であるということ、その現実をここの施設内の人たちが誰よりも理解していると思いました。

日々疲れて余裕がないときも多かったのですが、最終日に屋上で布団干しをしたときに見たコルカタの空の広さ、それが私にとって一番の心に残る景

色になりました。また、外国人ナースのボランティアたち、あんなにケンカしたリーダーのシスターとも笑顔でハグして別れることができました。

現場を自分の目で見て、どんなことでも経験する私にとって、ボランティアは究極の自己満足なのかもしれません。ただハッキリ言えるのは、このインドでの経験によって確実に見える景色が広がったということです。

現場に行き、理想と現実打ちのめされ、それでも1つ1つの出会いに感謝しながら見えない何かを受け取る、ボランティアはきっとその繰り返しなのかもしれません。全ての経験に無駄はありません。みなさんも機会があれば、ぜひ参加して自分の世界を広げてもらいたいと思います。

<体験・文> 近藤直子

このボランティア当時は辛い時も多かったけれど、今振り返るとかけがえのない体験ができたことに心から感謝しています。

マザーハウスとは...マザー・テレサの救済活動の拠点になっていた施設。1952年に「死を待つ人の家(カーリーガート)」を設立したのが最初。次のような施設があり、世界中からボランティアを受け入れている。

Shishu Bhavan(シシュババン):

10歳以下のハンディキャップを持った子どもと親がいない子どものための施設

Prem Dan(プレムダン):

老人ホームのようだが、重傷の人から自立している人まで多くの障害を持つ人が生活している

Shanti Dan(シャンティダン):

障害を持つ女の子と女性の施設

Nirmal Hriday(ニルマルヒルダイ)~死を待つ人の家(カーリーガート)~:

プレムダン同様、老人ホームのような施設だが、重症の人が多い

Daya Dan(ダヤダン):

ハンディキャップを持つ10歳以上の子どもの施設